

■（９６）記者の進路に成長著しい新分野

まもなく多くの企業の内定式の季節を迎える。新聞社にも来年春から記者職や営業職となる若者らが集まってくる。終身雇用型の新聞社だと、採用される時点ではまだ、写真部員などごく一部を除けば、仕事に専門性はない。

記者は新人時代、何でも担当する。事件や事故、行政、選挙、福祉、農業、漁業、野球、まちの話題……。そのうち、自分に何が向いているか、何が好きか、が見えてくる。一方、新人に仕事の指示を与え、その原稿を整えるデスクにも、その記者が何に向いているかが見えてくる。

進路が決まるのは、入社から５年ぐらいたったころ。政治部、経済部、社会部、スポーツ部など、それぞれ配属されていく。専門学校や大学を選ぶのと似ている。編集整理部門や校閲部門に進む記者は、それまでの外勤から会社内に詰める内勤への大転換で戸惑う人もいる。ただ、短時間で正確な内容の新聞を作り上げる技術はどこか職人的で奥深いことに気づく。

i P h o n e 5が発売された。毎度ながら、販売店の前に数日前から並ぶ人たちがテレビに映っていた。記者の進路の一つにも、今、急成長のデジタル部門が加わっている。

（山）